

P1-2-5 ASCUS トリアージと HPV 陽性症例の追跡調査

自治医大

森澤宏行, 藤原寛行, 高橋詳史, 佐藤尚人, 種市明代, 町田静生, 竹井裕二, 嵯峨 泰, 鈴木光明

【目的】本邦では ASCUS と判定された症例は ASCCP ガイドラインに準拠しハイリスク HPV-DNA 検査(以下 HPV 検査)を施行することが推奨されている。当科において、本ガイドラインに従って HPV 検査が行われた ASCUS 症例の転帰を調査したので報告する。【方法】2010年5月から2014年8月までに当科で経験した ASCUS364例(他院からの紹介を含む)全例に HPV 検査を施行し陽性の場合にはコルポスコピーによる精密検査が行われた。コルポスコピー下生検による組織診を最終診断としたが、異常なしにはコルポスコピー検査のみの症例も含まれる。【成績】ASCUS364症例中 HPV 検査陽性は104例(28.5%)であった。HPV 陽性症例中、CIN1~3が52例(50%)に認められたが、年齢別にみると50歳以下では CIN 有病率が42/69(60.8%)だったのに対し50歳以上では10/35(28.5%)と有意に低かった。しかし50歳以上35症例の異常なし症例中には SCJ 不可視症例が17例含まれていた。そのうち13例に子宮頸管内盲目的生検を追加で行ったところ7例に CIN が検出された。50歳以上の子宮頸管内盲目的生検での CIN を加味した修正 CIN 有病率は17/35(48.6%)で50歳以下の CIN 有病率と有意差は認めなかった($P=0.23$)。【結論】ASCUS/HPV 陽性者の追跡調査から、閉経後女性には SCJ 内向症例が含まれる割合が高いため、単回のコルポスコピー検査では CIN 病変を捉えられないことがわかった。ASCUS/HPV 陽性者のコルポスコピー検査において SCJ が不可視と判定された症例は子宮頸管内盲目的生検などを用いて定期的に精査を繰り返すことが重要であると考えられた。

P1-2-6 細胞診で ASC-US であった 260 症例の HPV および組織診についての検討

製鉄記念室蘭病院¹, NTT 東日本札幌病院²齋藤雅恵¹, 西川 鑑², 黒川晶子², 鈴木利理¹, 清水亜由美², 池田桂子², 二瓶岳人²

【目的】ベセスダシステムの普及により、他施設からの紹介患者も含めた当院での ASC-US 症例が増加している。今回、当院における2年間の ASC-US 症例の臨床所見、HPV 陽性率、組織診の結果とその転帰について検討した。【方法】2012~2013年の2年間に子宫颈部細胞診で ASC-US のため当院で精査、治療をおこなった症例を診療録から検索した。症例の年齢、過去の CIN 治療の有無、HPV 存否、HPV 陽性時の組織診の結果、CIN と診断した場合の治療の有無などについて後方視的に検討した。【成績】ASC-US のため当院で精査を行った症例は2年間で260例であった。平均年齢は41.8歳(18~85歳)。HPV 陽性例は107例(41%)であった。HPV 陽性患者の平均年齢は35.3歳に比べ陰性では46.2歳と、HPV 陽性患者が有意に若年であった。HPV 陽性107例のコルポスコピー下狙い組織診の結果は CIN1:49例, CIN2:20例, CIN3:15例, 組織診陰性:23例であった。治療を受けた割合は CIN1:4%, CIN2:40%, CIN3:100% であった。ASC-US 症例で HPV 陽性の場合78.5%に CIN が存在した。22例がレーザー蒸散術を受け、術後2か月の細胞診陰性化率95%であった。【結論】ASC-US で HPV 陽性症例の約8割に CIN が存在した。さらに HPV 陽性 ASC-US 症例の約2割に CIN3 が認められた。以上より、ASC-US の管理にはコルポスコープを用いた正確な生検手技が必要であり、ハイグレード病変に対しては適切な治療の時期と治療法を選択が重要であると考えられた。

P1-2-7 子宮頸部上皮内病変に対する HPV タイピング検査を併用した管理と治療

神戸大

施 裕徳, 蝦名康彦, 今福仁美, 宮原義也, 森田宏紀, 山田秀人

【目的】子宮頸部上皮内病変(CIN)患者に対する、細胞診・組織診に HPV タイピング検査を併用した管理と治療の有用性について検討した。【方法】2013年~2014年に CIN の組織診断後に、HPV タイピング検査(クリニチップ HPV)を行った37人(年齢中央値36歳, 範囲18~54歳)を対象とした。組織診断の内訳は、CIN1 6人, CIN2 15人, CIN3 16人であった。病理組織診断と HPV 型別判定結果、その後の治療と経過について検討した。【成績】25人(68%)が単独 HPV タイプ陽性、8人(22%)が複数 HPV タイプ陽性、そして4人が HPV 不検出であった。型別判定結果(重複あり)は、16型(10人)/18(1)/31(2)/33(2)/35(1)/39(1)/51(3)/52(10)/56(1)/58(10)/68(1)であり、16, 52, 58型の頻度が高かった。16/18/31/33/35/45/52/58型(超ハイリスク8タイプ)いずれかの陽性率は、CIN3では94%であり、CIN1ないしCIN2の62%に比して有意($p=0.04$)に頻度が高かった。CIN1/2の21人のうち、4例にレーザー蒸散を施行した。経過観察が可能であった15人の転帰は、増悪1人, 不変4人, 退縮10人であった。各群における超ハイリスク8タイプの陽性頻度は、増悪100%, 不変75%, 退縮40%であった。【結論】CIN1/2症例において、超ハイリスク8タイプのいずれかが陽性であれば、不変または増悪となる頻度は50%であった。年齢や経過観察の期間等を考慮しながら、レーザー蒸散などの早期介入を考慮する必要がある。

